

第九回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

小野 清美 著『テクノクラートの世界とナチズム

—「近代超克」のユートピア—

(1996年7月10日 ミネルヴァ書房 刊)

小野 清美 おの きよみ 昭和23年(1948)生まれ。徳島県出身。専攻は、ドイツ近現代政治史政治思想。東京外国語大学、東京都立大学人文学部卒業。名古屋大学法学研究科博士課程後期中退。ビーレフェルト大学・ミュンヘン大学留学。大阪外国語大学外国語学部教授(受賞時)。現在、大阪大学大学院法学研究科教授。著作は、『保守革命とナチズム—E・J・ユングの思想とワイマル末期の政治』、論文に「ヨハン・プレングの『戦争哲学』と社会主義論」(『近代世界システムの歴史的構図』所収)、翻訳に、ポイカール『ウェーバー 近代への診断』(共訳)、『ナチズムの歴史思想』(共訳)、他がある。

受賞のこぼ

身に余る賞を賜り大変うれしく光栄に存じます。私がこの間対話してきたドイツのテクノクラートや技術者イデオログたちは、和辻先生とほぼ同時代か少し前後の時代に生まれた人々です。彼らの時代との格闘は、初期にはニーチェやハイデガーと取り組まれた和辻先生のお仕事にも通じるところがあり、なにか不思議なご縁を感じます。選考委員の先生方のお励ましにお応えできるよう、微力ながら新たな気持ちで今後も努力して参りたいと思います。

《選考委員評》

勝部 真長

本書は、ドイツ近代史の研究者が、ワイマル共和国の崩壊から、ナチズムの勃興にかけて、政治過程や政策決定過程に深く関わりをもった人物、ラーテナウ、メレンドルフ、その他多くの技術者イデオログたちの働きを統一的にとらえ、近代という時代全体のなかにナチズムをどう位置づけるかを、内外の文献を渉猟して、徹底的に追求した、精力的な力作である。それはいわゆる経済大国となったわが国における科学技術の進歩、大衆社会状況、価値の空白化状況、人権や民主主義の危うさの指摘される現状にとっても大きい教訓となる先例なのである。

序論では、ナチズムにとって技術的合理性、技術者、テクノクラートが、何を意味し、いかに関わったか、ナチズムの人種主義や社会ダーウィニズムにふれ、ナチズムが国民大衆にとってなぜ魅力的であったか、その近代化概念を問題にする。

第一章「ドイツの技術者運動とテクノクラシー思想の形成」では、世紀末合理主義による近代批判、「権力への意志」と技術者との結合が扱われ、第二章「ラーテナウの近代批判」でユダヤ人とゲルマン人の問題、近代の超克、「魂の国」など宗教問題が扱われる。第三章「テクノクラートのユートピア」で、ラーテナウの社会改革論、民族共同体と指導者民主主義。第四章「エンジニアの理想主義」では、メレンドルフのロマン主義的技術主義的ユートピア、共同経済の構想、自立的国民経済などが紹介される。第五章「テクノクラートの構想とドイツの現実」でメレンドルフとラーテナウの決裂が、第六章「テクノクラシー的社会像の深化」で、個人主義と社会主義の調停が、そして終章「総括と展望」で、ヒトラーの近代批判とナチズムの描いた新しい社会にふれて、全く新しい境地の展開に成功している。

湯浅 泰雄

ワイマール共和国体制下のドイツ……次第に忍びよるナチズムの嵐の中にいた技術者たちのトップに立つ二人の指導者、ラーテナウとメレンドルフの生涯を追いつつ、現代史の悲劇は一体何を語っているのか、ということを考える。これがこの本のテーマである。著者は彼らの生い立ち、思想、技術者的思考、などについてくわしく分析する。十九世紀末以来、

ドイツは技術の進歩においてアメリカ、イギリスなどに遅れをとり、後進国意識が強かった。そこに、国民の団結によって先進国に追いつこうとするナショナリズムの気分が広がる。これが現代史におけるドイツの悲劇の始まりであった。

技術者はこのような状況の中で、科学技術による合理的思考に基づいたユートピアを目標とする。それと共に、ドイツ民族共同体の意識が強まる。そして、その集団的情念の高まりがロマン主義への憧れをかきたて、民族感情を刺激する。ラーテナウはユダヤ人であるだけに、その苦悩は大きかったであろう。ユダヤ神秘主義の思想に育てられた彼は、父祖の信仰を守りつつ、なおドイツ民族との一体化に努力し、最後は凶弾に倒れた。メレンドルフもまた自殺に追い込まれたのである。

当時のドイツでは、思想においてニーチェの影響がつよく、人間の「生」Lebenの根底に非合理的な衝動が潜むことをみつめ、自然への回帰や民族への献身によって、近代そのものを克服しようとする性急なロマン主義的感情が風靡した。このような状況下で技術者たちは、どこにみずからのアイデンティティ(技術者としての誇り)を求めたのであろうか。そこに、技術的ユートピアと民族共同体の理想が結びつく。著者はこのような錯綜した思想状況の中で、彼らがどのように行動し、努力しつづけたかという経過をくわしく実証的にたどっている。

アメリカ流のテイラー・システム(大量生産方式)の導入、共同経済組織、指導者民主主義への要望、近代合理思想の克服といった主題は、そのままナチズムへと向かう要因を示している。それらの動きが極点にまで達するとき悲劇の幕は上がるのである。

この本を読みながら、私は、ここには、現代国家が抱える諸問題の縮図が見出されるような感慨を覚えた。重厚な力作である。世界の諸民族・諸国家は、現在すべての地域で同じ問題に苦悩している。本書は、新しい斬新な視点から現代史をとらえ直すとともに、現代の読者に対して、歴史への反省にもとづいてわれわれの未来を考える上に大きな示唆を与えてくれる。和辻哲郎文化賞では、本書のような社会科学系の受賞は初めてである。受賞を喜びたい。

坂部 恵

ナチズムの支配が一面で効率の高いビューロクラート(官僚)の組織と心性に依存するところが多かったことについては、従来折りに触れて論じられてきた。それにひきくらべると、テクノクラートとナチズムの結びつきの特有の様相については、すくなくともわが国の一般公衆の間ではひろく知られることも論じられることもすくなかったように見受けられる。

ひとつには、問題が一見地味であること、第二には、問題の立ち入った論究にはとりわけきめの細かいアプローチを必要とし、不用意な評論家風の一般化が許されないこと、以上のことどもがその原因だろう。

本書は、この問題に正面から立ち向かった綿密・詳細をきわめるケース・スタディであり、同時にまた、近代というわれわれ自身がなおそのなかにある時代のありかたについて深く考えさせる思想的な問題提起の書でもある。

ラーテナウとメレンドルフという、いずれも悲劇的な死を遂げ、期せずしてナチス政権下でのテクノクラート支配の地ならしをすることとなった二人の人物についての委曲をつくした研究は、細部におよぶ叙述のみがもつ真摯な迫力をもつ。ユダヤ的心性やプロイセン的愛国心がナチズムのなかに錯綜をきわめたかたちで流れ入る。たとえばそんな「正史」ではお目にかかることのすくない衝撃に富んだ光景の数々に読者は出会うのである。

ナチズムの世界が、われわれの日常の心性とほんの皮一枚へだてたすぐ近くに息づいていることを知ってあらためて心をゆるがせられる。ここに本書の「収穫」はきわまるといってよいだろう。